



Title	大学生のコミュニケーション・スキルの特徴に関する研究：ENDCOREsを用いた検討
Author(s)	倉元, 俊輝; 大坊, 郁夫
Citation	対人社会心理学研究. 2012, 12, p. 149-156
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/6290">https://doi.org/10.18910/6290</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 大学生のコミュニケーション・スキルの特徴に関する研究<sup>1)</sup> —ENDCOREs を用いた検討—

倉元俊輝(大阪大学大学院人間科学研究科)<sup>2)</sup>

大坊郁夫(大阪大学大学院人間科学研究科)

本研究はコミュニケーション・スキル(CS)尺度であるENDCOREs(藤本・大坊, 2007)を用いて、尺度の因子構造を検討し、さらに大学生のCSについて検討を行った。調査対象者(286名)にはENDCOREsを用いて、CSの自己評価に回答を求めた。さらに、そのうち131名には自己評価だけでなく、相互作用時に会話の相手に要求するCSの程度(要求評価)にも回答を求めた。因子構造を検討したところ、解読力、他者受容、関係調整といったスキルは安定していたものの、主張的なスキルや自己統制はやや安定性を欠いた。また、年齢を分けてCSを検討したところ、自己主張スキルは年齢が高くなるにつれて高まることが示された。さらに、その年齢的な変化が他者に対するCSの要求にも影響することが示された。これらの結果から、年齢に応じた変化がCSの構造や程度に影響することが示唆された。

キーワード: コミュニケーション・スキル、社会的スキル、相互作用、ENDCOREs

## 問題

本調査の目的はコミュニケーション・スキル(以下、CS)尺度であるENDCOREs(藤本・大坊, 2007)を用いて、CSの構造を検討し、さらに大学生のCS特徴を抽出することである。

## 社会的スキルに関する研究

昨今、社会の中で「コミュニケーション力」が求められている。一例として、2010年に「異世代との対話力を磨こう」(産経新聞, 2010年8月26日)という表題の新聞記事が掲載された。その内容は「現代人は自分と『隔たり』を持つ人との対話力が欠落している。それを克服するための体験をすべきだ。」というものであった。このほかにも、平成21年度若年者雇用実態調査(厚生労働省, 2010)によれば、企業が若年労働者に対する育成目標として、「コミュニケーション能力」が全体の4位となっている。このことからも、社会における「コミュニケーションを円滑に営む能力」への関心をうかがうことができる。

現在、研究者間でこの能力に関する統一的な定義はまだ存在しないが、本研究の目的は「スキル」を再定義することではないため、CSと社会的スキルという言葉をほぼ同義のものとして併用する。ただし、文中では類似の概念についてはその著者の記述に従って記述する。社会的スキルの定義について大坊(1998)は他者と円滑な対人関係を築くための総合的な能力とし、菊池(1988)は他者からの肯定的反応を促し、否定的な反応を低減させることで対人関係を円滑にする能力であるとする。本研究ではこれらの定義に従い、社会的スキルを捉えていく。

社会的スキルに関しては国や文化によって違いがあることが指摘されている。実際、日本と他国とでは必要とされる社会的スキルが異なることを示す研究がある(田

中・藤原, 1992; 毛・大坊, 2008)。

これらの差異を生み出す要因として文化的バイアスがある(高井, 1994; Takai & Ota, 1994)。Takai & Ota(1994)は効果性と適切性の側面から対人的コンピテンスを捉えている。コンピテンスとは他者と効率的に相互作用を運ぶ能力とされ、CSと類似した概念である。また、効果性とはスキルがコミュニケーションの目的を果たすために特定の効果を発揮すること、適切性とは状況や規範に合致しているか否かを含意している。彼らは特に適切性に注目し、特定のスキルは特定の文化基盤での適切性のみを満たすため、そのまま活用することの問題を指摘する。

しかし、一方で小山・川島(2001)は日本と欧米の尺度を検討し、直接的なコミュニケーション能力についても共通すると主張している。すなわち、「話す・聞く」に関する基礎的なスキルは通文化的に捉えることができるという。これらの研究から、スキルの概念には通文化的に応用できる部分とその文化特有の部分の存在が示唆される。

以上の考えに基づき、本研究では通文化的、通状況的に応用できる社会的スキルに注目して検討を行う。その理由は、基礎的なスキルの枠に入るテーマが現代では社会的な問題として注目されていることにある。つまり、先の新聞記事の例でも「自分のことを主張し、相手の話に耳を傾けることができない」ことが問題とされている。また、企業が求める「コミュニケーション能力」も意思疎通を円滑に図るための基礎的な能力と考えられる。

もちろん、通文化的で基礎的なスキルと文化固有のスキルの区別は明確にはなく、スキルは文化や規範の影響を免れることはできない。しかし、社会的スキルを捉えるステップとして基礎的なスキルから始めることは妥当な手段であると考える。それゆえ、基礎的なスキルについ

て本研究では扱う。

### スキルの階層性とコミュニケーション・スキル

さて、では、日本では社会的スキルをどのように捉えているのであろうか。実際に使用されているスキル尺度を概観し、スキルの構造を検討する。

まず、Takai & Ota(1994)が作成した JICS (Japanese Interpersonal Competence Scales)は「察し能力(Perceptive Ability)」、「自己統制(Self-Restraint)」、「階層的関係管理(Hierarchical Relationship Management)」、「対人感受性(Interpersonal Sensitivity)」、「曖昧さ耐性(Tolerance for Ambiguity)」という日本人に特有の因子で構成されている。高井(1994)が文化一般的な尺度として挙げているものに、KiSS-18(Kikuchi's Social Skills; 菊池, 1988)がある。菊池(2004)はこの尺度が用いられた研究を概観し、コミュニケーション行動など具体的な行動との関連性を示唆している。KiSS-18 自体は元来 1 因子構造であるが、様々な研究で因子が検討されており、「コミュニケーション・スキル」、「問題処理スキル」、「問題解決スキル」の 3 因子も認められている(菊池, 2004)。また、海外の尺度を邦訳した尺度として樋野(1988)による SSI(Social Skill Inventory)日本語版がある。これは情動性と社会性(前者は非言語、後者は言語行動の表出、解読、調整に関連)の 2 つの要素を中心として 6 因子で構成される。

以上に挙げたものと比較して、より具体的な行動の観点から作成されたものが和田(1991, 1992)によるノンバーバルおよびソーシャル・スキル尺度である。これは対人的な行動を非言語の観点と言語の観点で区別し、それぞれについて 3 因子を抽出している。これに類する尺度として非言語表出性に注目した尺度 ACT(Affective Communication Test)がある(大坊, 1991)。これは、記号化の能力を問うものであるが、解読力とも正の相関関係があることが明らかになっている。

ここで注目されるのは各々の尺度間で共通性のある因子と独自性のある因子が混在していることである。例えば、いずれの尺度においても表出や解読のスキルが共通し、調整、管理、コントロールに関わるスキルにおいて微妙な差異がある。このことから各尺度間で共通する因子は通文化的、通状況的なスキル、言い換えれば、状況によらず必要となる基礎的なスキルと考えられる。一方で、独自性の高いスキルは特定の文化、状況で用いられる応用的なスキルと言える。このように基礎的なスキルと応用的なスキルが存在しているとするとスキルを解釈するうえで階層性の観点が必要となる。

スキルの階層性に関しては多くの指摘がある。相川(2009)では他者に対する反応が階層構造のプロセスを成すことを主張している。また、大坊(2006, 2008)はコミ

ュニケーションでの情報を収集するプロセスを基盤として、文化や規範に影響を受け、それらを意味づけるプロセスが存在することを示唆する。具体的なモデルを示した例として後藤・大坊(2003)のスキルのモデルがある。これは 3 段階のスキルのステップがあり、基礎的なスキルから応用的なスキルへと階層が上昇する中で、直接的なメッセージの処理のレベルから文化や規範を処理するレベルが想定されている。

これらの階層的な考え方をより具体的に示した研究として藤本・大坊(2007)の「スキルの扇」とENDCOREs が挙げられる(Figure 1 参照)。彼らは多様なスキル尺度を概観し、ひとつのスキル体系を提示している。

「スキルの扇」は、コミュニケーションにおける言語・非言語行動に関わる CS を基盤とし、対人関係に主眼をおいた社会性に関わる社会的スキルがその上位に布置し、さらに上位に文化・社会への適応において必要な能力であるストラテジーが布置する構造を成す。

このうち CS を測定する尺度が END COREs である。その構成は、自分の感情や行動をうまくコントロールする「自己統制」スキル、自分の考えや気持ちをうまく表現する「表現力」スキル、相手の伝えたい考えや気持ちを正しく読み取る「解読力」スキル、自分の意見や立場を相手に受け入れてもらえるように主張する「自己主張」スキル、相手を尊重して相手の意見や立場を理解する「他者受容」スキル、周囲の人間関係にはたらきかけ良好な状態に調整する「関係調整」スキルとなる。

通文化的、通状況的な社会的スキルが社会で関心を得ていることは先に述べたが、END COREs はまさに通文化、通状況的なコミュニケーション行動に焦点を合わせているといえる。その理由として、藤本・大坊(2007)の研究で示されているように、この社会的スキル尺度は他のスキル尺度の基礎スキルと関連性を持っている。また、Riggio(1986)が Basic Social Skills として挙げているのは「表出性・感受性・統制能力」である。これは「表出系・反応系・管理系」の体系を据える END COREs と類似している。その意味において、本スキルを通状況的な基礎スキルとして捉えることに、一定の妥当性は認められる。

そこで本研究では、基礎的な社会的スキルを捉えるのに有効性があると考えられる END COREs を用いて、CS の因子構造を検討する。

### 大学生におけるコミュニケーション・スキル

さて、先に挙げたニュースや昨今の就職活動において注目されているように若年層における CS は当人のみならず、彼らに関わる人にとっても小さくはないトピックである。加えて、大学生の時期はアルバイトや就職活動などにおいてより広い社会関係を結ぶ時期であり、基礎的な社会的スキルの重要性も高まる。このような観点から、

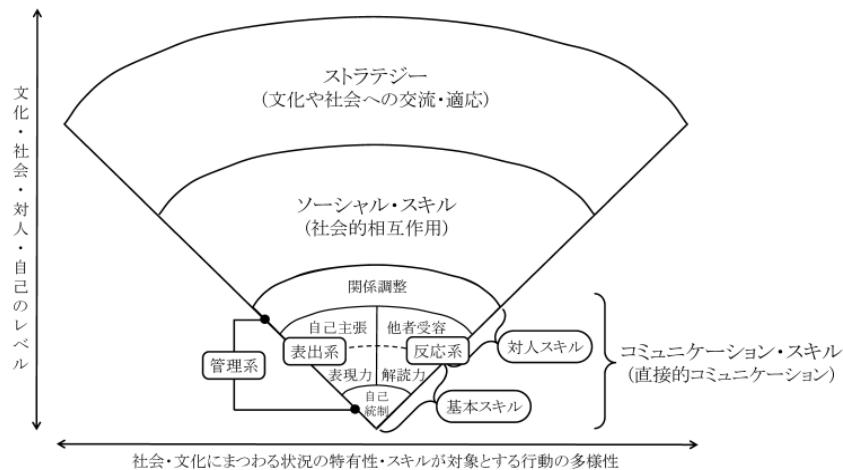


Figure 1 スキルの扇 (藤本・大坊(2007)より引用)

本研究では特に大学生が自分自身のスキルをどのように評価しているのかについて注目し、調査を実施した。

さらに、本研究では大学生における CS の特徴をより明確にするために、会話相手に求める CS の程度(要求評価)もあわせて検討する。Argyle & Henderson (1985)は人間関係には一定のルールがあり、そのルールを順守するために必要となる要素が CS であると主張する。人間関係が相互のやりとりの中で構築されるものであるならば、単に自分自身の CS のみならず、相手に望む CS も重要となるであろう。というのも、自分がコミュニケーションの中でこうすべき、こうあってほしいと考えていることを必ずしも相手が行うわけではない。それゆえ、このようなコミュニケーションの中での認知のズレは関係を構築する上で大変な障害となり得る。その点で、個人における自己と他者の両面に対する CS 認知を捉えることは有用であると考えられる。

そこで本研究では ENDCOREs を用いて、大学生における CS の自己評価と他者に対する要求評価を比較し、CS に対する認知的な構えを検討した。さらに、年齢や性別の観点を加え、探索的な検討も実施した。

## 方法

### 調査対象者

対象者は関西地区の男女大学生・大学院生 286 名(女性 207 名、男性 76 名、性別不明 3 名; 平均年齢 19.83 歳、標準偏差 3.30)であった。このうち、131 名(女性 94 名、男性 36 名、性別不明 1 名; 平均年齢 20.21 歳、標準偏差 2.84)には、ENDCOREs の自己評価とともに、相互作用時に会話をする相手に対して求めるスキルの程度についてもあわせて回答を求めた。

### 手続き

調査は 2009 年 12 月から 2010 年 11 月にかけて、心

理学関連の授業の際に行われた。

調査対象者のうち 131 名には自分自身の CS の評価について回答を求めるだけでなく、相互作用の際に会話の相手に対して求める CS の程度についても回答を求めた。

### ENDCOREs

本研究で用いる ENDCOREs は 6 因子で構成され、基本スキルとして「自己統制」、「表現力」、「解読力」が、対人スキルとして「自己主張」、「他者受容」、「関係調整」が定義されている。さらに、機能の区分では、マネジメントの行動特性を表すスキルを管理系として「自己統制」と「関係調整」を定め、表出的な行動に関わる特性を表出系として「表現力」と「自己主張」、応答的な行動に関わる特性を反応系として「解読力」と「他者受容」がそれぞれ定められている。また、1 つ 1 つの項目もサブスキルとして定義がなされている。

藤本・大坊(2007)では「自己主張」、「表現力」、「解読力」はそれぞれ正の相関関係にあり、それらが対人スキルの下位構造をなすことが示されている。大学生の ENDCOREs の自己評価を検討した結果では、日本人大学生は平均して表出系よりも反応系のスキルに優れており、管理系スキルもわずかながら高いという結果が得られている。

## 結果

### ENDCOREs の自己評価に関する検討

**因子構造の確認** 全対象者のデータを用いて ENDCOREs の因子構造を因子分析(反復主因子法・プロマックス回転)を用いて検討した(Table 1 参照)。

抽出された因子構造は藤本・大坊(2007)の結果とほぼ同様であった。第 1~3 因子はそれぞれ先行研究の他者受容、解読力、関係調整に合致した。

Table 1 ENDCOREs の因子構造(反復主因子法・プロマックス回転)

番号	項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子	共通性
20	相手の意見や立場を尊重する	.84	-.10	.05	.04	.06	.03	.73
19	相手の意見をできるかぎり受け入れる	.78	-.06	.03	-.10	.04	.01	.62
17	相手の意見や立場に共感する	.68	.04	.04	-.07	.08	.02	.54
18	友好的な態度で相手に接する	.55	.05	.25	.03	.02	.02	.56
10	相手の気持ちをしげさから正しく読み取る	-.02	.92	-.03	.00	-.04	-.10	.74
11	相手の気持ちを表情から正しく読み取る	.05	.84	-.06	-.10	.10	-.02	.72
12	相手の感情や心理状態を敏感に感じ取る	.01	.76	.04	-.10	.08	.02	.64
9	相手の考えを発言から正しく読み取る	-.15	.65	.09	.06	.00	.15	.53
21	人間関係を第一に考えて行動する	.07	-.09	.84	-.13	.05	-.01	.73
22	人間関係を良好な状態に維持するように心がける	.12	.03	.77	-.17	-.03	-.06	.68
23	意見の対立による不和を適切に対処する	.16	.13	.42	.30	-.06	.00	.46
24	感情的な対立による不和に適切に対処する	.14	.18	.37	.25	-.16	.07	.41
14	まわりとは関係なく自分の意見や立場を明らかにする	-.03	-.08	-.17	.68	.04	-.14	.46
16	自分の主張を論理的に筋道を立てて説明する	.04	-.04	-.11	.64	.00	.14	.44
15	納得させるために相手に柔軟に対応して話を進める	.43	.16	-.06	.51	-.10	-.02	.48
13	会話の主導権を握って話を進める	-.17	-.05	.17	.47	.25	-.19	.37
5	自分の考えを言葉でうまく表現する	-.15	.01	.07	.43	.25	.23	.44
7	自分の気持ちを表情でうまく表現する	.16	.03	-.07	-.05	.82	-.06	.67
6	自分の気持ちをしげさでうまく表現する	-.07	-.02	.11	.20	.67	.09	.62
8	自分の感情や心理状態を正しく察してもらう	.10	.16	-.09	.08	.54	-.02	.41
1	自分の衝動や欲求を抑える	.05	-.02	-.07	-.13	-.03	.83	.64
2	自分の感情をうまくコントロールする	.08	-.02	.04	.10	-.05	.66	.52
3	善悪の判断に基づいて正しい行動を選択する	-.02	.10	-.01	.05	.21	.40	.30
4	まわりの期待に応じた振る舞いをする	.12	.12	.19	-.02	.10	.19	.24

一方で、第4、5因子については表現力、自己主張の表出系と呼ばれるスキルとほぼ同様の因子構造を示すものの、項目5(自分の考えを言葉で上手く表現する)は藤本・大坊(2007)の結果と異なり、自己主張スキルに寄与するという結果が得られた。また、第6因子は自己統制スキルと類似した因子構造であるが、項目4(まわりの期待に応じた振る舞いをする)が寄与せず、独立した結果となった。

唯一、項目4が独立した項目となったものの、先行研究に従う結果が得られたことから、因子ごとに平均値を算出し、それぞれの因子得点とした。

各因子の内的整合性を検討するために $\alpha$ 係数を算出したところ、自己統制( $\alpha = .67$ )、表現力( $\alpha = .75$ )、解読力( $\alpha = .87$ )、自己主張( $\alpha = .64$ )、他者受容( $\alpha = .85$ )、関係調整( $\alpha = .78$ )となった。構造が先行研究と十分に一致しなかった自己主張と自己統制は $\alpha$ 係数がやや低い値となった。ただ、自己統制の内的整合性の傾向については先行研究においても類似した結果が得られている。全体的な傾向としては先行研究に従う結果が得られた。それゆえ、以下はそれぞれの因子ごとの検討を行った。

**性差に関する検討** 先行研究では自己統制スキル得点において女性が男性よりも高いという結果が得られている(藤本・大坊, 2007)。本研究においても性差を検討するために因子得点(合成得点)の平均値を用いて $t$ 検定を実施した。その結果、自己統制に関しては有意な差は

Table 2 CS 因子得点の平均値と男女比較

	全体(N = 287)		女性(N = 208)		男性(N = 76)	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
自己統制	4.69	0.87	4.69	0.87	4.72	0.89
表現力	3.89	0.95	3.94	0.96	3.76	0.93
解読力	4.68	0.96	4.78	0.91	> 4.46	1.03
自己主張	3.91	0.91	3.86	0.83	4.08	1.10
他者受容	5.20	0.83	5.22	0.80	5.13	0.91
関係調整	4.83	0.92	4.89	0.88	4.67	1.03

注) 不等号は  $p < .05$  で差があることを示す。男女の合計人数が全体と合わないのは性別不明者が3名いるため。

みられなかった(Table 2 参照)。一方で、解読力において有意な差がみられた( $t(282) = 2.58, p < .05$ )。そのほかの項目に関しては有意な差は確認されなかった。

**年齢に関する検討** 先行研究では年齢に関する検討は十分にされていない。しかしながら、CSが学習可能なものであるならば成長に伴って獲得されると考えられる。そこで、本研究では参加者の年齢を4つに分類し、年齢によってスキルの程度に違いが生じるかどうかを検討した。年齢は大学生の学年による分類した(Table 3 参照)。

従属変数をそれぞれのスキル因子得点とし、独立変数を年齢の4カテゴリーとする1要因分散分析を実施した(Figure 2, 3 参照)。

Table 3 年齢ごとの CS 因子得点の平均値

	18歳 (N = 44)		19歳 (N = 137)		20歳 (N = 72)		21歳以上 (N = 37)	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
自己統制	4.40	0.98	4.78	0.80	4.65	0.85	4.82	0.95
表現力	3.88	0.80	3.79	0.92	3.96	1.03	4.14	1.05
解読力	4.60	1.04	4.71	0.94	4.67	0.86	4.70	1.10
自己主張	3.93	0.79	3.83	0.88	3.78	0.98	4.41	0.89
他者受容	5.06	0.84	5.22	0.81	5.18	0.87	5.36	0.79
関係調整	4.80	0.81	4.80	0.85	4.83	1.06	4.95	1.02

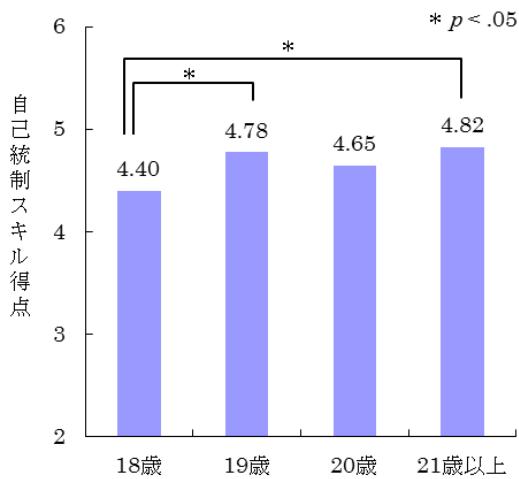


Figure 2 自己統制スキルの年齢間比較

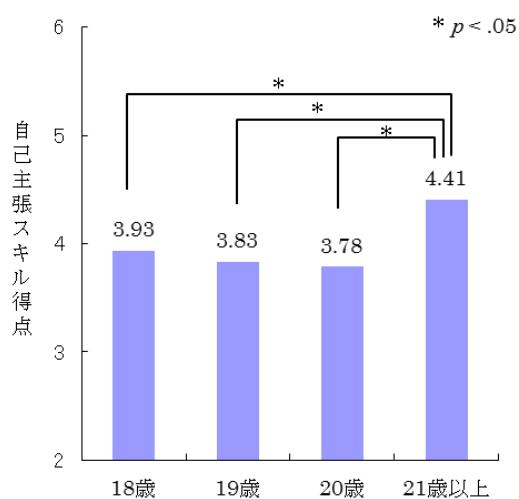


Figure 3 自己主張スキルの年齢間比較

その結果、自己統制と自己主張に関して有意差、有意傾向差がみられた(それぞれ  $F(3, 283) = 2.50, p < .10$ ;  $F(3, 283) = 4.58, p < .01$ )。さらに、下位検定を行ったところ、自己統制に関しては 21 歳以上と 18 歳の間におよび 19 歳と 18 歳の間に有意差が確認された。また、自己主張に関しては 21 歳以上と他の年齢との間に有意差が確認された。

### 相手に要求するスキルとの比較

スキルの自己評価と会話相手に求めるスキルの程度(要求評価)について回答を求めた 131 人のデータを用いて検討を行った。それぞれの因子に関して平均値を算出し、スキル因子得点とした。内的相関を検討するため  $\alpha$ 係数を算出したところ、自己評価については自己統制( $\alpha = .59$ )、表現力( $\alpha = .73$ )、解読力( $\alpha = .83$ )、自己主張( $\alpha = .67$ )、他者受容( $\alpha = .81$ )、関係調整( $\alpha = .77$ )となった。一方、要求評価は自己統制( $\alpha = .67$ )、表現力( $\alpha = .79$ )、解読力( $\alpha = .75$ )、自己主張( $\alpha = .61$ )、他者受容( $\alpha = .77$ )、関係調整( $\alpha = .84$ )となった。これらの結果に関しても、自己評価・要求評価に関わらず、主張的なスキルがやや不安定であることが確認された。

自己評価と要求評価の関連性を検討するために相関分析を行った(Table 4 参照)。

その結果、同 CS 因子間では自己評価と要求評価の間に正の相関関係がみられた。しかし、自己主張に関しては有意な相関関係が示されなかった。

**性差に関する検討** 性差を検討するためにスキルの自己評価と要求評価を従属変数として  $t$  検定を実施した(Table 5 参照)。

その結果、解読力の自己評価については女性の方が高いという結果が得られた。さらに、表現力についても性差がみられ、女性の方が表現力に関する自己評価が高いことが示された。

一方で要求評価では性差は確認されず、男女ともに相手に求める程度は同等であることが示唆された。

Table 4 CS の自己評価と要求評価の相関関係

	自己評価					
	自己統制	表現力	解読力	自己主張	他者受容	関係調整
自己統制	.39***	.15 <sup>†</sup>	.24**	-.01	.07	.29***
表現力	.15 <sup>†</sup>	.34***	.28***	.07	.11	.31***
解読力	.17 <sup>†</sup>	.27**	.27**	.04	.23**	.28**
自己主張	.01	.01	.04	.11	.03	.08
他者受容	.12	.23**	.16 <sup>†</sup>	-.01	.35***	.36***
関係調整	.18*	.22*	.25**	-.07	.38***	.51***

\*\*\* :  $p < .001$  \*\* :  $p < .01$  \* :  $p < .05$  † :  $p < .10$

Table 5 CS 因子の平均値と男女比較

	全体(N = 131)		女性(N = 94)		男性(N = 36)		
	M	SD	M	SD	M	SD	
自己評価	4.65	0.83	4.61	0.79	4.76	0.92	
表現力	3.96	0.95	4.09	0.92	>	3.60	0.98
解読力	4.66	0.94	4.78	0.86	>	4.38	1.07
自己主張	3.93	0.98	3.90	0.82	4.01	1.33	
他者受容	5.22	0.79	5.22	0.73	5.21	0.94	
関係調整	4.77	0.96	4.83	0.91	4.64	1.08	

注) 不等号は  $p < .05$  で差があることを示す。男女の合計人数が全体と合わないのは性別不明者が 1 名いるため。

**年齢に関する検討** 年齢による分類を行った。自己評価のみを分析したデータでは4つのカテゴリーに分類したが、本データは18歳の人数が少なかったため、18歳と19歳を合わせて1つのカテゴリーとし、3つのカテゴリーで検討を行った(Table 6 参照)。

条件間の差異を検討するために、因子得点を従属変数とし、3(年齢 18・19歳、20歳、21歳以上)×2(評価対象: 自己、要求)とする2要因分散分析を行った。

その結果、他者受容スキルを除くすべてのCS因子において評価対象の主効果がみられた(自己統制:  $F(1, 128) = 4.59, p < .05$ ; 表現力:  $F(1, 128) = 54.91, p < .001$ ; 解読力:  $F(1, 128) = 7.58, p < .01$ ; 自己主張:  $F(1, 128) = 16.73, p < .001$ ; 関係調整:  $F(1, 128) = 7.39, p < .01$ )。すなわち、自分自身に対するCS評価よりも、会話相手が上手に解読したり、表現したりすることを期待することが示唆された。

さらに、解読力では交互作用効果が確認された( $F(2, 128) = 3.41, p < .05$ )。下位検定を行ったところ、18・19歳群、20歳群においてCSの要求評価が自己評価よりも大きくなることが示された。また、要求評価において21歳以上群が20歳群よりも小さくなることが示された(Figure 4 参照)。

また、自己主張においては年齢の主効果( $F(2, 128) = 3.17, p < .05$ )がみられ、21歳以上群と20歳群の間に有意差がみられた。すなわち、21歳以上群の方が20歳群よりもCS評価を高く見積もることが示唆された。さらに有意傾向ながら交互作用( $F(2, 128) = 2.77, p < .10$ )が確認された。下位検定を行ったところ、18・19歳群、20歳群においてCSの要求評価が自己評価よりも大きくなることが示された。さらに、自己評価において21歳以上の場合は、他の年齢よりも自分の自己主張スキルを高く評価することが示された(Figure 5 参照)。

Table 6 年齢ごとのCS因子得点の平均値

18・19歳(N = 53)		20歳(N = 56)		21歳以上(N = 22)		
自己評価	M	SD	M	SD	M	SD
自己統制	4.58	0.77	4.69	0.80	4.69	1.02
表現力	3.78	0.80	4.08	1.03	4.09	1.07
解読力	4.55	0.85	4.70	0.89	4.82	1.25
自己主張	3.83	0.89	3.83	1.00	4.41	1.06
他者受容	5.12	0.76	5.27	0.78	5.32	0.89
関係調整	4.67	0.77	4.83	1.07	4.88	1.10
要求評価	M	SD	M	SD	M	SD
自己統制	4.78	0.71	4.94	0.78	4.63	1.31
表現力	4.66	0.74	4.68	0.99	4.57	1.11
解読力	4.86	0.77	5.12	0.78	4.55	1.03
自己主張	4.52	0.65	4.17	0.87	4.41	0.95
他者受容	5.20	0.73	5.21	0.80	5.23	0.99
関係調整	4.89	0.78	5.15	1.02	4.86	1.10

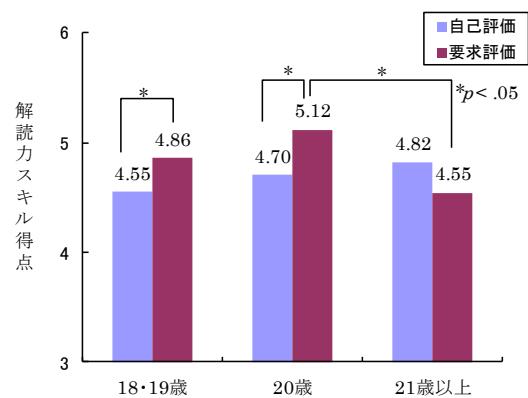


Figure 4 解読力スキルの自己評価および要求評価に関する年齢間比較

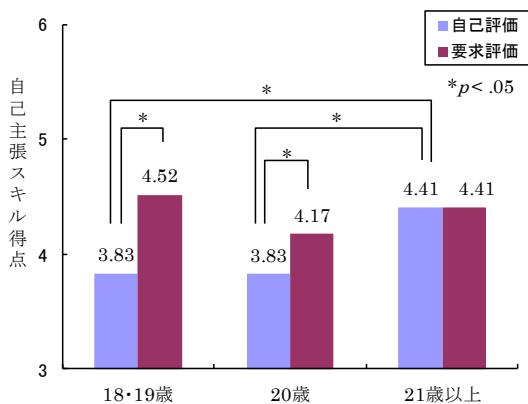


Figure 5 自己主張スキルの自己評価および要求評価に関する年齢間比較

## 考察

### ENDCOREs の自己評価

ENDCOREs の因子構造と年齢段階の観点 因子構造は藤本・大坊(2007)に従う傾向がみられたものの、項目によっては若干の差異がみられた。具体的には、相互作用相手に対する配慮に関するCS因子(解読力・他者受容・関係調整)は安定した構造が得られたのに対し、主張的なCS因子(表現力・自己主張)や自己の管理(自己統制)では一致しない項目もみられた。

この結果について年齢の観点からひとつの示唆が得られる。それは自己統制や表出系のスキルは年齢に従って獲得され、安定した構造になるという考察である。

まず、表出系スキルである表現力と自己主張に関しては表出する側面に違いがみられる。項目から判断すると、表現力は自分の感情や気持ちといった情緒的な面の表出が中心であるのに対し、自己主張では意見や考えの表出が中心的である。

本研究において年齢ごとに比較した結果では、21歳以上の場合に他の年齢との間で差がみられている。21

歳という年齢は大学生の3~4年生にあたり、多くの学生が就職活動などを通じて社会と触れ合うようになる年齢である。また、クラブやアルバイト先ではより責任のある役割を任されることもしばしばである。このような経験を通じて、互いを受容しながら生活するところからステップをのぼり、集団の中で自己を管理し、表現することを獲得していくのではないかと考えられる。表出系スキル因子の力点を踏まえると、年齢が上がるほど自分の意見や考えを具体的に、また論理的に表明することが求められる。こういった年齢による表出系スキルや自己統制スキルに対する認知のズレがやや安定を欠いた構造を生み出したと考えられる。

**性差** 解読力について女性の方が男性よりも自己評価が高いという結果が得られた。これは藤本・大坊(2007)では確認されなかった結果である。しかしながら、男性と比較して女性の方が対人感受性に優れているという指摘(大坊, 1998; 相川, 2009)もある。先行研究と異なる結果が示されたのは、先行研究と比べて男女の比率にやや偏りがあったことが原因である可能性もある。

### ENDCOREs の自己評価と要求評価の比較

**会話相手に何を求めるか** CS は行動としての側面だけでなく、規範的な側面も持つと考えられる。Argyle & Henderson(1985)は人間関係におけるルールを維持するために必要な能力が CS であると指摘している。CS が円滑な相互作用に寄与することから考えても、「このようにはじめに振る舞って欲しい」という期待が会話相手に向けた規範となりうる。本節では CS の自己評価との比較から、相互作用の中で求められる CS について検討する。

まず、CS の自己評価と要求評価の間にはほとんどの対応する因子間で正の相関関係がみられた。CS の自己評価は必ずしも相互作用時の行動を反映するわけではないが、少なくともその人物の相互作用に対する認知的な傾向を示すものと言える。それを踏まえると、正の相関関係にあることは、自分自身の CS を評価する程度が高いほど、比例して相手に対して CS を要求するということである。Argyle & Henderson(1985)が主張するように CS を人間関係におけるルールを維持するために必要な能力と考えるならば、自分の CS の程度に応じた能力を相手に求めるのは社会的なルールを維持するために少なくとも自分の能力に見合う程度の CS を求めた結果と言える。

さらに、分散分析の結果では一部の因子を除いて要求評価が自己評価を上回った。

自己主張スキルに関して言えば、自己評価と要求評価の相関関係が確認されず、一方で分散分析の結果から要求評価と自己評価の間に有意差がみられ、要求評価が高くなかった。このことは、配慮的なスキルが高いと

いう結果を踏まえると、大学生の相互作用における他者依存的な傾向を示唆すると考えられる。すなわち、自分が相手に対して配慮する程度に比例して、相手にも自分以上に配慮することを期待するだけでなく、相手からのより巧みな自己主張を望むということである。後藤・大坊(2003)は大学生の苦手なコミュニケーション場面として少し見知った相手や長期的な関係が見込まれる人の出会いを挙げ、このような相手との間では情報が不足しており、相手の出方を観察しながら行動をすることが求められるという。本調査の結果も、相手が巧みな主張者である方が情報を得やすく、それに反応するコミュニケーションを参加者が理想としていることを示す結果であろう。

また、表現力においては対応する因子間で正の相関関係がみられているのに対し、自己主張ではみられていないことも重要である。前述のように、これらの違いは、表現力は情緒的な情報の伝達に重点が置かれているのに対し、自己主張では自分の意見や意思を伝える面に重点が置かれている点にある。このことから、意見を的確に伝えるための自分の能力よりも、相手の能力を要求するところに、大学生が自己主張スキルに対する自信を欠いていることがうかがえる。

**年齢的観点** 自己評価だけでなく、要求評価においても年齢による影響がみられた。具体的には解読力と自己主張については 18・19 歳、20 歳では自己評価よりも要求評価の方が高い値を示したのに対し、21 歳以上ではその傾向は確認されなかった。

この結果は、年齢に応じた自己主張スキルの自己評価の高まりが原因と考えられる。21 歳以上では自己主張スキルの自己評価が他の年齢よりも高いことが示された。これを踏まえると、自分の自己主張スキルに自信がない年齢では、相手の解読力を求めるが、成長に伴い自分の自己主張スキルが高まることによって相手の解読力を求めなくなると考えられる。すなわち、年齢が低い場合には主張的なスキルを欠いており(少なくとも、欠いていると自己認知しており)、それゆえに会話相手の解読力を期待するが、年齢が上がるにつれて自己主張に自信をもつようになり、相手に求めなくなると考えられる。

### まとめ

本研究はENDCOREsを用いてCSの因子構造を確認し、大学生のCSを年齢的観点から検討した。

CSの因子構造については解読力、他者受容、関係調整といった配慮的スキルは安定しているものの、表現力・自己主張の表出系スキル、自己統制についてはやや安定性に欠けることが示唆された。これに関して、年齢を分けて検討したところ、年齢によって差がみられた。このことから、表出系スキルなどに関しては年齢が上が

るに伴って獲得されるため、大学生全体をみれば因子構造が若干不安定になると考えられた。

さらに、CS の自己評価と要求評価を比較検討したところ、大学生の他者依存的な傾向が示唆された。つまり、相手に自分以上に配慮した振る舞いを期待するだけでなく、相手がより巧みな主張者であることを望むということである。ただし、この結果についても、年齢が上がり、社会とのかかわりの中で自身の自己主張スキルにおける変化が生じれば、他者に対する要求にも影響することが示唆された。

ENDCOREs は他の社会的スキル尺度との間にも関連性が示されており、内容的な妥当性は検討されている。本研究では因子構造を確認し、年齢的な観点から検討を加えたことに意義があると考えられる。今後の展開として、より高次な社会的スキルの表出を様々なコミュニケーション場面で検討する必要があると考えられる。

### 引用文献

- 相川 充 (2009). 新版 人づきあいの技術 ソーシャル・スキルの心理学 サイエンス社
- Argyle, M., & Henderson, M. (1985). *The anatomy of relationships and the rules and skills needed to manage them successfully*. UK: Penguin books. (吉森 譲訳 (1992). 人間関係のルールとスキル 北大路書房)
- 大坊郁夫 (1991). 非言語的表出性の測定: ACT 尺度の構成 北星学園大学文学部北星論集, **28**, 1-12.
- 大坊郁夫 (1998). しぐさのコミュニケーション—人は親しみをどう伝えあうか— サイエンス社
- 大坊郁夫 (2006). 社会的場面を考慮したコミュニケーション・スキルの研究 電子情報通信学会技術研究報告, **105**, 1-6.
- 大坊郁夫 (2008). 社会的スキルの階層的概念 対人社会心理学研究, **8**, 1-6.
- 藤本 学・大坊郁夫 (2007). コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み パーソナリティ心理学研究, **15**, 347-361.
- 後藤 学・大坊郁夫 (2003). 大学生はどんな対人場面を苦手とし、得意とするのか？—コミュニケーション場面に  
関する自由記述と社会的スキルとの関連— 対人社会心理学研究, **3**, 57-63.
- 樋野 潤 (1988). 社会的技能研究の統合的アプローチ(1) —SSI の信頼性と妥当性の検討— 関西大学大学院人間科学・社会学・心理学研究, **31**, 1-17.
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する 川島書店
- 菊池章夫 (2004). KiSS-18 研究ノート 岩手県立大学社会福祉学部紀要, **6**, 41-51.
- 厚生労働省 (2010). 平成21年若年者雇用実態調査結果の概況 1-26.  
<<http://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/koyou/young/h21/dl/gaikyo.pdf>>
- 小山慎治・川島浩美 (2001). コミュニケーション能力の評価—評価者と尺度の文化的要因に関する実態調査— 異文化コミュニケーション研究, **31**, 15-29.
- 毛 新華・大坊郁夫 (2008). 社会的スキルの内容に関する中国人大学生と日本人大学生の比較 対人社会心理学研究, **8**, 123-128.
- Riggio, R. E. (1986). Assessment of Basic Social Skills. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 649-660.
- 産経新聞 (2010). 異世代との対話を磨こう「多様な人とふれあう体験を」 2010 年 8 月 26 日 <<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20100826-00000113-san+soci>>
- 高井次郎 (1994). 対人コンピテンス研究と文化的要因 対人行動学研究, **12**, 1-10.
- Takai, J., & Ota, H. (1994). Assessing Japanese interpersonal communication competence. *The Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, **33**, 224-236
- 田中共子・藤原武弘 (1992). 在日留学生の対人行動上の困難—異文化適応を促進するための日本のソーシャル・スキルの検討— 社会心理学研究, **7**, 92-101.
- 和田 実 (1991). 対人的有能性に関する研究—ノンバーバルスキル尺度およびソーシャルスキル尺度の作成— 實験社会心理学研究, **31**, 49-59.
- 和田 実 (1992). ノンバーバルスキルおよびソーシャルスキル尺度の改訂 東京学芸大学紀要, **43**, 123-136.

### 註

- 1) 本研究は第一著者の修士論文(平成 22 年度大阪大学人間科学研究科)のデータに加筆・修正を行ったものである。
- 2) 現所属: 株式会社 ブリヂストン

## Research for the communication skills of university students

Toshiki KURAMOTO (Graduate School of Human Science, Osaka University)

Ikuro DAIBO (Graduate School of Human Science, Osaka University)

We investigated a factor pattern of ENDCOREs (Fujimoto & Daibo, 2007), which was the scale of communication skills (CS), and examined university students' CS features. Participants (286 university students) responded to the questionnaire about their CS, and 131 of them responded to the questionnaire concerning the demand of CS for a companion during social interaction settings. Regarding a factor pattern, decipherer ability, acceptance of others and regulation of interpersonal relationship had enough stability, while encoding skills (expressivity and assertiveness) and self-control lacked stability. It is suggested that assertiveness develops more and more as age become larger, and this developmental stages affect demand of CS for a companion.

Keywords: communication skills, social skills, interaction, ENDCOREs.